

三郎川と丸佐川の環境調査を進めています

えんの森では、酪農地帯の自然環境の改善へ向けて、今年三郎川と丸佐川を対象に環境調査を行っています。

この二つの川は浜中町と別海町を流れている風蓮川水系ノコベリベツ川の支流です。三郎川の落差工は、魚道が設置されている取水堰だけで、河道はほぼ自然のままです。丸佐川は排水路として整備され、浜中町で落差工が最も多く設置されており、14カ所あります。本流に支流の1～5号川が流れ込んでおり、本流に6カ所、2号川に8カ所の落差工が設置されています。行政的には本流をマルサ1号幹線明渠、2号川をマルサ2号幹線明渠と呼んでいます。

丸佐川の落差工



現在までに確認された魚類は、丸佐川本流ではヤツメウナギ、アメマス、ニジマス、サクラマス、サケ、カラフトマス、フクドジョウ、エソトミヨ、イバラトミオ、ウキゴリの10種。

丸佐2号川は、ヤツメウナギ、アメマス、サクラマス、サケ、ヤチウグイ、フクドジョウ、エソトミヨ、イバラトミヨの8種。

三郎川は、ヤツメウナギ、シベリアヤツメ、アメマス、ニジマス、サクラマス、エソトミヨ、イバラトミヨ、ウキゴリ、エソハナカジカの9種です。

今回、三郎川で特定外来種のウチダザリガニが初めて確認されました。このまま放置すれば生態系に大きな影響があると心配されます。

現時点では、丸佐川で植樹をした方がよい場所が1カ所、瀬と淵を作ると魚類が棲みやすくなると思われる場所が数カ所、倒木が川を塞ぎ、流れが変わって岸をえぐっている場所が1カ所あることなどがわかりました。まずは今年中に倒木を除去し、除去した倒木を使ってえぐられた場所を護岸することを計画です。
(事務局長・河原淳)

旧浜中町立西円朱別小学校を借用し、事務所としました

8月1日に浜中町と正式契約し、西円朱別小学校を活動拠点として借りました。1階は職員室、校長室、保健室、普通教室3つ、音楽室、ホール、2階は図書室、家庭科・理科室、資料室。1階の職員室と校長室を事務所として使い、普通教室の1室ではえんの森の活動と剥製を使って地域の自然を紹介しています。

近くにお越しの際は、ぜひお寄りください。詳しくはホームページ（アドレスは3ページに）をご覧ください。

住所：浜中町西円朱別西18線181番地

電話：0153-65-3020 ファクス：0153-65-3021



2011年度決算および12年度予算、事業計画

2011年度決算 (単位・円)		2012年度予算 (単位・円)		2012年度の主な事業計画
収入計	6,343,925	収入計	18,490,107	
支出計	3,904,118	支出計	16,055,000	
収支差額	2,439,807	収支差額	2,435,107	<ul style="list-style-type: none"> ●丸佐川・三郎川の環境復元計画策定 ●西円朱別小学校の活用 ●多摩動物公園との共同研究 など

フォトエッセー

まきばを渡る風

Vol. 2 「独立樹」 菅井喜久雄



牧草地の中に一本だけで凛と立っている木があります。昔の方々が開墾の際に隣地との境目に残したのか、桜は切るに忍びなかったのか、以前はあちらこちらで見かけたものです。何故この木を残したのか、開墾や牧草作業の合間に木の下で何を語り合ったのだろうか、そんなことを木の下で子供達と話してみたいなあと思ったこともあります。残念ながら我が家には独立樹がありません。

畑の中の木は確かに邪魔な存在ですので、機械の大型化・高性能化で畑の区画も大きくなり、草が更新されるのに伴って、いつの間にか姿を消していきついでに。特に桜が少なくなってしまったのは残念です。放牧地では牛のために日陰を作る木として、根が深く丈夫なナラなどがまだまだ数多く残されて異彩を放っています。

地域の地図に木の位置を記して、特徴のある木には名前を付けたりしても面白そうですね。花の季節にはその地図を片手に、もう一方にはビールを持ってお花見ドライブ。もちろんノンアルコールで。

(えんの森運営委員、酪農業)

ホームページ開設しました <http://www.least-shrew.jp/enmori/>

浜中の生き物たち 河原 淳

哺乳類編 トウキョウトガリネズミ②

トウキョウトガリネズミが国内で初めて捕獲されたのは1903年、Hawkerによってでした。

しかし、その後54年間捕獲されませんでした。トウキョウトガリネズミと命名されたのは、Thomasが1906年の論文に産地名をInukawa, Yedo, Hondoと書いたため「東京の犬川」で捕獲されたと解釈されたからです。

実際には東京に犬川という地名がないこと（北海道にもありません）、その後北海道でしか捕獲されないこと、本州で化石が出ていないことから、北海道の鷗川Mukawaの間違ひではないかと疑問視されてきました。元北大教授の阿部永氏が、英国自然史博物館にある1903年の標本を調べたところ、頭骨と毛皮のラベルには筆記体でInukawa, Yedoと書かれ、頭骨の入っている管瓶のコルク栓にはMukawaと書かれていたそうです。よって、mとInの書き間違えと判断し、鷗川で捕獲されたものと断定しました。ただし、どちらもYedoと書かれていたそうです。

一般的にYedoとYezoの書き間違えと書かれますが、実際には「m」と「in」の書き間違えであって、江戸と蝦夷の間違ひではありません。本人は本州の江戸鷗川と書いたのでしょうか。時代的には明治後期で、江戸も蝦夷も言葉として生きていたのでしょうか、外国人には発音の差は区別が出来なかったのでしょうか。未だに正確に伝えられないのは本種の宿命なのでしょうか？ (えんの森事務局長)



連載「えんなんびと」その2 小椋 守さん

酪農地帯の水と魚を見つめながら

「川べりでフクジュソウが咲くと、イトウさんが来るんだよな」

ぼそりと語る言葉に、経験に裏付けられた奥行きがある。浜中・厚岸地方の川と魚のことを語らせたら、浜中町西円朱別の酪農家、小椋守（おぐら・まもる）さん（63）の右に出る人はちょっといないでしょう。

昭和初期に和歌山県から入植した酪農家の3代目。生家は、かつて宮大工だった祖父がトドマツで建てた本州式の家でした。身近な素材を使って施設を建てたりする祖父や父らの姿を見て育ち、大工仕事を覚えたのは自然な流れでした。

「イトウさんも棲める川がいい」

地域の暮らしは、自然の中の草や木を巧みに利用しながら営まれてきました。多種多様な山菜で食卓を飾ったり、河畔の樹木シロコ（キハダ）の樹皮をはいて、乳牛の脚のけがの消毒や、煎じて胃薬に用いたり。日本最大の淡水魚イトウも、かつては貴重なタンパク源。大人が仕留めた1メートルを超す大物に心躍らせ、くまなく川を歩くようになりました。

それゆえ酪農地帯の川の姿の変遷を、つぶさに見てきました。河畔林は伐られ、蛇行する川が直線化・護岸され、落差工もできて生き物が減っていったのです。大規模な農地開発で酪農は飛躍的に発展しましたが、改良を施しても牧草栽培には適さない川べりの湿地さえ草地化されることに、心の底では疑問を感じてきました。「そこまでしないとならんのかな、と。やっぱりイトウさんも棲める川がいいよな」

三郎川の魚道づくりを経験して、仲間と協力しあいながら自然環境を守り、長く酪農を続けたいとの思いを強くした小椋さん。現在は長男に経営を譲って町農業委員などを務めつつ、えんの森の活動を中核として担いながら、川と魚にひとときわ優しい視線を向けています。



あなたの力を貸してください。

NPO法人えんの森の活動は、会員の皆様の力で支えられています。2012年11月7日現在、正会員（社員）25人、サポーター会員105人、団体会員13団体。ご支援に心から感謝します。

■サポーター会員 年会費2,000円 ■団体会員 年会費1口10,000円（1口以上）

■会費・寄付の口座

- 大地みらい信用金庫 浜中支店 普通1035531 特定非営利活動法人えんの森 理事長 二瓶 昭
- JAバンク 浜中町農業協同組合本所 普通0014728 NPO法人えんの森 理事長 二瓶 昭
- 郵便振替口座 02760-2-80105 NPO法人えんの森

★団体会員：飛鳥苑、蝦夷三官寺學研究所、株式会社 興和工業、コマツ道東(株)釧路支店、三光産業株式会社、日本配合飼料(株)、日本全業工業、根室湾中部漁業協同組合、(有)浜中町就職者研修牧場本場、浜中町農業協同組合、北海道オリオン(株)浜中営業所、(株)丸夕村田商店、(株)野生生物総合研究所（敬称略）

NPO法人えんの森ニュースレター「えんの森通信」第3号（2012年11月発行）
En no mori News Letter No.3 November 2012

■発行■ 特定非営利活動法人 えんの森

■編集■ 中川 大介

■特定非営利活動法人えんの森事務局 北海道厚岸郡浜中町西円朱別18線181番地
電話:0153・65・3020 ファクス:0153・65・3021
電子メール：enmori@least-shrew.jp



えんの森通信

En no mori News Letter No.3 November 2012



視察相次ぎ、交流活発に



8月から9月にかけて、えんの森には研修や視察で、浜中町外から多くの方が相次ぎ訪れて来られました。地域外との交流は、えんの森の活動を多くの方々知ってもらうことに加え、地域の魅力を地元の人々があらためて発見したり、地域内の人々のつながりを深める良いきっかけとなっています。

まず8月16～27日には、酪農学園大（江別市）の学生7人が夏休みを活用してボランティア活動を行いました。えんの森の活動拠点の旧浜中町立西円朱別小学校の活用策を考えようと、地元の子供たちと「ペットボトルでの的あて」「野菜ロケット」などの「科学あそび」を実施。さらに落とし罠を仕掛けて小さな生き物トガリネズミを捕獲したり、川を歩いて魚を捕まえたり、はたまた海鳥が漁網で混獲されるのを防ぐためのデコイ（鳥の形をした模型）を作る手伝いをしたり。時には調査地でヒグマの出没におびえ、また捕獲したヤマメなどの魚の美しさに目を輝かせながら、浜中の自然の豊かさを実感し、自然と調和した暮らしを営むことの大切さを感じてもらいました。



丸佐川の魚類調査を手伝う酪農大生

兵庫などからも視察に



9月4日には、兵庫県立大学や北大、総合地球環境学研究所などの研究者の方々が、環境保全活動と地域との関係を中心にヒアリングにいられました。えんの森からは、環境保全は行政がやるべきことと思えるけれど、1次産業関係者が保全活動を行うことは地方自治のようなもので、住民が自らの未来を選択できることが重要と考えている一などと説明しました。

9月10～12日には、北大森林政策学の実習学生23人、先生5人を受け入れました。えんの森の設立の経緯や「緑の回廊」運動について説明し、牧場や植林地、三郎川の魚道を視察してもらいました。夜には地域の酪農家の方々にも集まっただいて、焼き肉を囲みながら交流会も開き、大いに盛り上がりました。



北大生との焼肉懇親会

交流を通じて、えんの森の役職員もいろいろな面で刺激を受けました。この出会いが今後、どのように発展していくか、何が生まれるか楽しみでもあります。今後も「縁」を大きく大きく広げていきたいと願っています。

（理事・中川大介）